

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖神 共 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 の た め え に

どうていぢよよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 を 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしのびそのこ光
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給

【 瞽者主日のコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す、

ハリストスよ、われたましいのめのくらみたる
 我 靈 の 目 夢

ものおは、うまれながらのめしいのご
 者 生 の 瞽 者 如

と く 、 なんぢに つきて 、 つう かい をもって
爾 就 痛 悔 以

よ お ぶ 、 なんぢは くら やみ に ある もの
呼 爾 黒 暗 在 者

の いた りて あ きら かなる ひか り な り 。
至 明 光

【 パスハのコンダク 第8調 】

いまも いつも よよ に、アミ ン。
今 何時 世世

し せ ぎ るハリスト スか みよ 、 なんぢは は かに く
死 神 爾 墓 降

だ れ ども ぢご くの ち から を や ぶ り 、 か 勝
地 獄 力 破

つ も の と し て ふ く か つ せ り 、 けい こう
者 復 活 携 香

ぢよ に よ ろ こ べ よ と い い 、 なんぢの し と に へ 平
女 慶 言 爾 使 徒 平

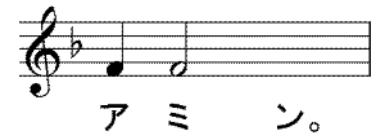
い あ んを あ た え 、 ほ ろ び し も の に ふ く
安 與 亡 者 復

か つ を た ま え り 。
活 賜

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第8調 】

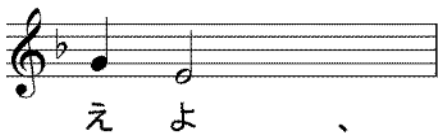
司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

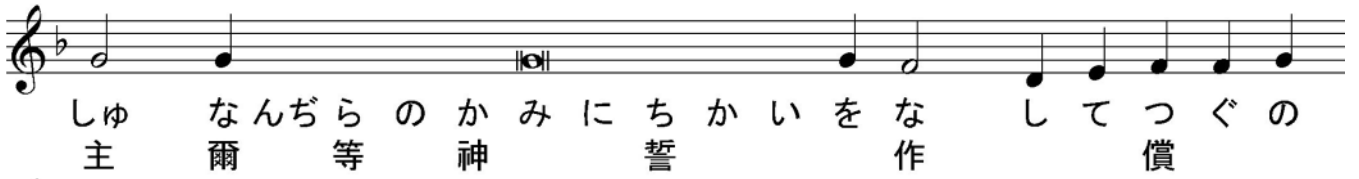
誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

し ゅ な ん ぢ ら の か み に ち か い を な し て つ ぐ の
 主 爾 等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) ^{かみ}神はイウデヤに知られ、^し其名はイスライリに ^{そのな}大 ^{おお}なり、



しゅ なんぢら の かみにちかいをなしてつぐの
主 爾 等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) ^{しゅなんぢら}主 爾 等 ^{かみ}の神に



ちかいをなしてつぐのえよ、
誓 作 償

【 ^{アポストロス}使徒經 38 端 聖使徒行實 16 章 16~34 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしとこうじつ}聖使徒行實の讀、^{よみ}

司祭) ^{つつし}謹 ^きみて聽くべし、

誦經) ^か彼の日、^ひ使徒等が^{しとら}祈禱^{きとう}の^{ところ}所に^ゆ適^{とき}きし時、^{うらない}ト^{きよ}筮^{ひとり}の鬼に^{しもめわれら}憑^あらるる一の婢我等に^あ遇^あえり、

^{うらない}ト^{もつ}筮を以て^{そのしゅ}其^{おお}主に^り多^えくの利を得^{もの}しめたる者なり。彼が^{かれ}パヴェル及^{およ}び^{われら}我等に^{したが}従^よいて、呼^よび

て^い曰^こえり、此の^{ひとびと}人^{しじょう}人は^{かみ}至^{しよぼく}上なる神の^{われら}諸^{すくい}僕にして、我等に^{みち}救^{つた}の道^{もの}を傳^{ひひさ}うる者なり。日^ひ久

しく^{これ}之^{おこな}を行^{つい}いしに、^{これ}パヴェル^{いと}遂^{かえり}に之^きを厭^いい、^{われ}顧^{われ}みて^{われ}鬼に^{われ}謂^{われ}えり、我^{われ}イイスス^{われ}ハリストス

の^な名^{もつ}を以て、^{なんぢ}爾^{かれ}に^い彼^{めい}より^{きたちまちい}出^{しもめ}づる^{しゅ}を命^{そのり}ず。鬼^{のぞみ}忽^{むな}出^{むな}でたり。婢^{のぞみ}の主^{むな}は^{むな}其^{むな}利^{むな}の^{むな}望^{むな}の^{むな}空^{むな}し

くなり^みたる^みを見て、^{とら}パヴェル^{いち}と^{つかさら}シラ^{まえ}とを^ひ執^{すで}えて、^{じょうかん}市^ひに^ひ有^ひ司^ひ等の^ひ前^ひに^ひ曳^ひけり。既^ひに^ひ上^ひ官^ひに^ひ曳^ひき

來^{きた}りて^い曰^こえり、此の^{ひとびと}人^{じん}人は^{われら}イウデヤ^{まち}人^{みだ}にして、^{われら}我等^{じん}の^う邑^うを^う擾^うし、^う我等^うロ^うマ^う人^うに^う受^うく^うべ^うから

ず^{おこな}行^{れい}う^{つた}べ^{たみ}から^{またひと}ざる^た例^{かれら}を^せ傳^{じょうかん}う。民^{かれら}も^せ亦^せ齊^せしく^せ起^せちて、^せ彼^せ等^せを^せ攻^せめ、^せ上^せ官^せは^せ彼^せ等^せの^せ衣^せを

は^{めい}命^{かれら}じて^{むち}彼^{おお}等^{むち}を^{のち}杖^{ひとや}う^{くだ}た^{ごくり}し^{かた}め^{かれら}たり。多^{まも}く^{まも}杖^{まも}うち^{まも}て^{まも}後^{まも}、^{まも}獄^{まも}に^{まも}下^{まも}し、^{まも}獄^{まも}吏^{まも}に^{まも}固^{まも}く^{まも}彼^{まも}等^{まも}を^{まも}守^{まも}

らんことを命ぜり。獄吏是くの如き命を受けて、彼等を内獄に下し、其足に梏を加えたり。夜半の頃、パヴェル及びシラ祈禱して、神を讚榮せり、囚者之を聞けり。俄に大なる地震ありて、獄の基動き、諸門皆忽啓け、各人の械は解けたり。獄吏醒めて、獄の諸門の啓けたるを見て、囚者逃げたりと意い、刀を抜きて自殺せんと欲せり。然れどもパヴェル大なる聲を以て呼びて曰えり、自ら戕う勿れ、蓋我等皆此に在り。彼火を求めて、躍り入り、戦きてパヴェル及びシラの前に俯伏し、彼等を外に導き出して曰えり、君よ、我何を爲して、救を得べきか。彼等曰えり、主イイスハリストスを信ぜよ、然らば爾及び爾の全家救を得ん。乃主の言を彼及び凡そ其家に在る者に傳えたり。彼は夜の即時に彼等を取りて、其傷を濯い、直に自ら其全家と洗を受けたり。遂に彼等を引きて、己の家に入れ、食膳を具え、全家と偕に神を信ぜし事を喜べり。

(比較用 口語訳) 使徒たちが、祈り場に行く途中、占いの霊につかれた女奴隷に出会った。彼女は占いをし、その主人たちに多くの利益を得させていた者である。この女が、パウロやわたしたちのあとを追ってきては、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」と、叫び出すのであった。そして、そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはてて、その霊にむかい「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬間に霊が女から出て行った。彼女の主人たちは、自分らの利益を得る望みが絶えたのを見て、パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡すため広場に引きずって行った。それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです」。群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたてたので、長官たちはふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じた。それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかりとかけておいた。真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいていた。ところが突然、大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまった。獄吏は目をさまし、獄の戸が開いてしまっているのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思い、つるぎを抜いて自殺しかけた。そこでパウロは大声をあげて言った、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」。すると、獄吏は、あかりを手に入れた上、獄に駆け込んできて、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏した。それから、ふたりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」。ふたりが言った、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。それから、彼とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた。彼は真夜中にもかかわらず、ふたりを引き取って、その打ち傷を洗ってやった。そして、その場で自分も家族も、ひとり残らずバプテスマを受け、さらに、ふたりを自分の家に案内して食事のもてなしをし、神を信じる者

となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

【 アリルイヤ 第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{われ かえり われ あわれ たま} 我を顧み、我を憐み給え、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{わ あし なんぢ ことば かた たま} 我が足を爾の言に固め給え、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

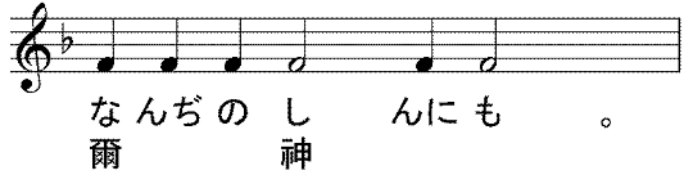
ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし
よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

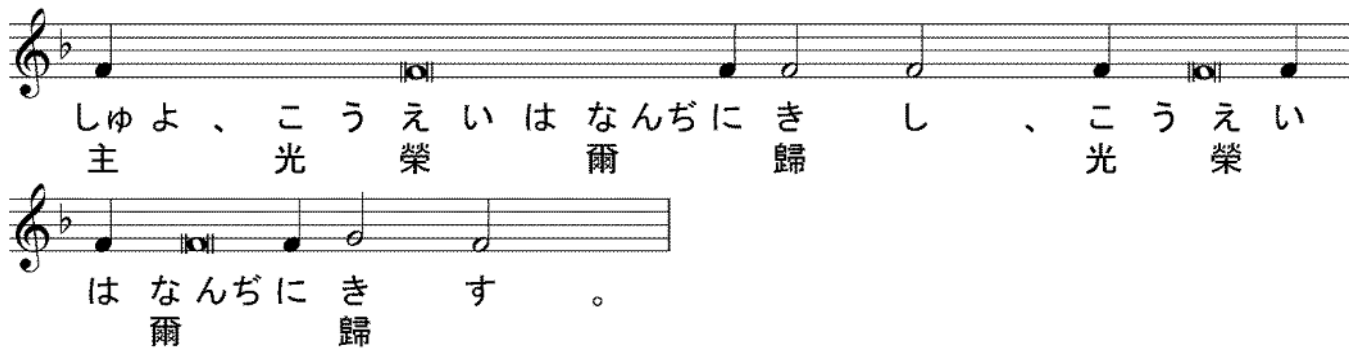
ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書34端9章1節~38節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイスス行けるに、生れながら警なる人を見たり。門徒彼に

と い ラヴィ こ ひと めしい うま こ たれ つみ え かれ そもそもその
問いて曰へり、夫子、斯の人の警にして生れしは、是れ孰か罪を獲たる、彼か、抑其

おや こた い かれ つみ え そのおや またしか すなはちかれ おい かみ わざ
親か。イイスス答えて曰えり、彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃彼に於て神の作爲

あらわ ため われなおひる あいだ われ つかわ もの わざ な よるきた そのとき
の顯れん爲なり。我尚畫なる間、我を遣しし者の作爲を爲すべし、夜來る、其時

たれ な あた われよ あ とき よ ひかり これ い ち つばき つばき もつ
は誰も爲す能わず。我世に在る時は、世の光なり。之を言いて、地に唾し、唾を以て

どろ な そのどろ めしい め ぬ これ い ゆ いけ あら
泥を成し、其泥を警の目に塗りて、之に謂えり、往きて、シロアムの池に洗え。(シロアム、

やく つかわ もの かれゆ あら み え きた そのとなり ひと およ さき
譯すれば、遣されし者なり。) 彼往きて洗い、見るを得て來れり。其隣の人及び先に

かれ めしい み ものい こ ぎ こ もの あら あるひと い これ かれ
彼が警なるを見し者曰えり、此れ坐して乞いし者に非ずや。或曰えり、是は彼なり、

あるひと い かれ に もの かれ い これ われ かれらこれ い なんぢ め
或曰えり、彼に似たる者なり、彼は曰えり、是は我なり。彼等之に謂えり、爾の目は

いか ひら かれこた い な ひと どろ な わ め ぬ
如何にして啓けたるか。彼答えて曰えり、イイススと名づくる人、泥を成して、我が目に塗り

われ い いけ ゆ あら われゆ あら み え かれらい
て、我に謂えり、シロアムの池に往きて洗えと、我往きて洗いて見るを得たり。彼等曰えり、

そのひといつく あ いわ われし こ めしい もの ら たづさ いた
其人 安 に在るか。曰く、我 知らず。此の 瞽 たりし者をファリセイ等に 攜 え至る。イイ
ススが泥 を成して、其目を 啓 きし日は、安息日なり。ファリセイ等も亦 其如何に見るを得たる
とを問いたれば、 答 えて曰えり、泥 を我の目に置き、我 洗 いて見るを得たり。ファリセイ等の中
の或 者曰えり、斯の人は神よりするに非ず、安息日を守らざればなり。他の者曰えり、罪あ
る人は 安 ぞ是くの如き奇蹟を行 うを得ん。是に於て彼等の中に紛論ありき。復
めしい い なんぢ かれ こと おい なに い けだしかれ なんぢ め ひら いわ こ
瞽者に謂う、爾 は彼の事に於て何を言わんか。蓋 彼は爾の目を 啓 きたり。曰く、是
れ預言者なり。イウデヤ人は其素 瞽 にして、後に見るを得たるを信ぜずして、此の見るを
得たる者の二親を呼び至らしむるを待ちて、之に問いて曰えり、此れ 爾 等の子、 爾 等が
瞽 にして生れたりと曰う者なるか、今如何にして見るか。其親 彼等に 答 えて曰えり、此れ
わ こ またそのめしい うま われらこれ し しか いまいか み
我が子なること、亦 其 瞽 にして生れたることは、我等之を知る、然れども今如何にして見
るか、我等之を知らず、或 は誰か其目を 啓 きしを我等知らず。彼は年 長 ぜり、彼に問
うべし、自 ら己の事を語らん。親の斯く言いしは、イウデヤ人を懼れしに困りてなり、蓋
イウデヤ人 已に相謀りて、若し人 彼をハリストスと認めば、會堂より 黜 けらるべしと定
めたり。是の故に其親は、彼は年 長 ぜり、彼に問うべしと曰えり。是に於て 瞽 たりし
ひと ふたたびよ これ い こうえい かみ き われら こ ひと ざいにん し かれ
人を 再 呼びて、之に謂えり、光榮を神に歸せよ、我等は斯の人の罪人たるを知る。彼
こた い そのざいにん いな われこれ し ただひとつ こと し すなわち われもめしい
答 えて曰えり、其罪人たりや否や、我之を知らず、惟 一 の事を知る、即 ち我本 瞽
たりしに、今は見る。又之に謂えり、彼は何を 爾 に爲ししか、如何にして 爾の目を 啓 き
し。答 えて曰えり、我 已に 爾 等に言えり、而して 爾 等聴かざりき、何ぞ復聞かんと欲
する、豈 爾 等も彼の門徒と爲らんと欲するか。彼等之を 詬 りて曰えり、爾 は其門徒、
われら もんと われら かみ かた し しか こ ひと いづ
我等はモイセイの門徒なり。我等は神がモイセイに語りしを知る、然れども斯の人の奚れ
よりするを知らず。其人 答 えて彼等に謂えり、此は奇しき事なり、 爾 等は彼の 奚 より
するを知らず、然るに彼は我が目を 啓 きたり。我等は神が罪人に聴かざるを知る、然れど
も ひとかみ うやま そのむね おこな こ ひと き よ はじめ このかた いま ひと うまれ
も若し人神を 敬 い、其旨を行 はば、斯の人に聴く。世の始より以來、未だ人の 生

ながら 警 なる 者の 目を 啓きしを 聞かざりき。若し、斯の人 神よりせしに 非ずば、何 事をも
 行 うを得ざりしならん。彼等之に 答えて曰えり、爾 は 全 くに 罪の中に 生れたり、而 し
 て 爾 我等を 教うるか。遂に 彼を 外に 逐い出せり。イイススは 其 彼を 逐い出だししを 聞き
 て、彼に 遇いて曰えり、爾 神の子を 信ずるか。彼 答えて曰えり、主よ、是れ 誰なるか、我
 が 彼を 信ぜん 爲なり。イイスス之に 謂えり、爾 已に 彼を見たり、且 爾と 語る者は 是
 なり。彼曰えり、主よ、我 信ず、乃 彼を 拜せり。

(比較用 口語訳) イエスが道をとおっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならぬ。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。わたしは、この世にいる間は、世の光である」。イエスはそう言って、地につばきをし、そのつばきで、どろをつくり、そのどろを盲人の目に塗り、言われた、「シロアム(つかわされた者、の意)の池に行き洗いなさい」。そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって、帰って行った。近所の人々や、彼がもと、こじきであったのを見知っていた人々が言った、「この人は、すわってこじきをしていた者ではないか」。ある人々は「その人だ」と言い、他の人々は「いや、ただあの人のように見ただけだ」と言った。しかし、本人は「わたしがそれだ」と言った。そこで人々は彼に言った、「では、おまえの目はどうしてあいたのか」。彼は答えた、「イエスというかたが、どろをつくらせて、わたしの目に塗り、『シロアムに行き洗いなさい』と言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました」。人々は彼に言った、「その人はどこにいるのか」。彼は「知りません」と答えた。人々は、もと盲人であったこの人を、パリサイ人たちのところにつれて行った。イエスがどろをつくらせて彼の目をあけたのは、安息日であった。パリサイ人たちはまた、「どうして見えるようになったのか」と彼に尋ねた。彼は答えた、「あのかたがわたしの目にどろを塗り、わたしがそれを洗い、そして見えるようになりました」。そこで、あるパリサイ人たちが言った、「その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから」。しかし、ほかの人々は言った、「罪のある人が、どうしてそのようなしを行ふことができようか」。そして彼らの間に分争が生じた。そこで彼らは、もう一度この盲人に聞いた、「おまえの目をあけてくれたその人を、どう思うか」。「預言者だと思います」と彼は言った。ユダヤ人たちは、彼がもと盲人であったが見えるようになったことを、まだ信じなかった。ついに彼らは、目が見えるようになったこの人の両親を呼んで、尋ねて言った、「これが、生れつき盲人であったと、おまえたちの言っているむすこか。それではどうして、いま目が見えるのか」。両親は答えて言った、「これがわたしどものむすこであること、また生れつき盲人であったことは存じています。しかし、どうしていま見えるようになったのか、それは知りません。また、だれがその目をあけて下さったのかも知りません。あれに聞いて下さい。あれはもうおとなですから、自分のことは自分で話せるでしょう」。両親はユダヤ人たちを恐れていたもので、こう答えたのである。それは、もしイエスをキリストと告白する者があれば、会堂から追い出すことに、ユダヤ人たちが既に決めていたからである。彼の両親が「おとなですから、あれに聞いて下さい」と言ったのは、そのためであった。そこで彼らは、盲人であった人をもう一度呼んで言った、「神に栄光を帰するがよい。あの人(イエス)が罪人であることは、わたしたちにはわかっている」。すると彼は言った、「あのかたが罪人であるかどうか、わたしは知りません。ただ一つのことだけ知っています。

す。わたしは盲であったが、今は見えるということです」。そこで彼らは言った、「その人はおまえに何をしたのか。どんなにしておまえの目をあけたのか」。彼は答えた、「そのことはもう話してあげたのに、聞いてくれませんでした。なぜまた聞こうとするのですか。あなたがたも、あの人の弟子になりたいのですか」。そこで彼らは彼をののしって言った、「おまえはあれの弟子だが、わたしたちはモーセの弟子だ。モーセに神が語られたということは知っている。だが、あの人がどこからきた者か、わたしたちは知らぬ」。そこで彼が答えて言った、「わたしの目をあけて下さったのに、そのかたがどこからきたか、ご存じないとは、不思議千万です。わたしたちはこのことを知っています。神は罪人の言うことはお聞きいれになりませんが、神を敬い、そのみこころを行う人の言うことは、聞きいれて下さいます。生れつき盲であった者の目をあけた人があるということは、世界が始まって以来、聞いたことがありません。もしあのかたが神からきた人でなかったら、何一つできなかつたはずですよ」。これを聞いて彼らは言った、「おまえは全く罪の中に生れていながら、わたしたちを教えようとするのか」。そして彼を外へ追い出した。イエスは、その人が外へ追い出されたことを聞かれた。そして彼に会って言われた、「あなたは人の子を信じるか」。彼は答えて言った、「主よ、それはどなたですか。そのかたを信じたいのですが」。イエスは彼に言われた、「あなたは、もうその人に会っている。今あなたと話しているのが、その人である」。すると彼は、「主よ、信じます」と言って、イエスを拝した。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸 す。

※聖体礼儀③ へ